

ちっとも知らなかった本の読み方

今日は目からウロコの本の読み方体験をお話ししたいと思います。

小田野早秧先生の本を入力し終わって気づいたことがあります。これまで何回も読んでいたのに、入力しながら、

「え〜、こんなこと書いてあったの？ ち〜っとも気が付かなかった」

と何回も思いました。そこで先日光透波を学ぶ仲間と先生の本の読み会をしてみました。その人も何回も読んでいる人なので二人で「どのくらい分っているか（いないか）」を検べてみることにしたのです。

まず、一作目の『生命の原理』を選びました。

現代では吾々の肉眼視野は、顕微鏡望遠鏡の視力に電子力も併用して、自然の現象する森羅万象を最大漏らさず検討し尽くそうとしているが、まだ最後に余りにも根本的な大きな見落としが眼前にあるという問題を残している。

この段落の次が問題の箇所です。

それは吾々が知り又知りつつある様々な現象実在を、現に抱容している基盤であるところの、宇宙大空間の「真空＝何もない最後のもの即ち無」の実質と、吾々人間自体がこの宇宙の様々な現象実在を知り、又知ろうとする力「知性」そのものの実質と、この知性を以て今現在に生きつつある吾々の「生命」の実質、この三つの実質の理解だけが現実の吾々の知生活に未だに全くの空白を残しているということにある。

誰でも「もの」の本質を正しく知り、完き理解を遂げれば、その「もの」をよく活用することは必然である。正しく活用できないのは、その「もの」を知らないという実証である。

二人のどちらが何を言ったかはどうでも良いので名前は書きません。文字色だけ変えます。

何もない「最後のもの」って何かしら 何もないのに最初も最後もないじゃない？

分らないわね。

もしかしたら究極って意味かな。「究極の無い」ならその手前に「究極ではない無い」が有る訳よね。そっちの無いはどういうものだろう？

分んない。

じゃあ次に三つの実質の内ひとつでも分っているものある？

え？どの三つ？

「無」と「知性」と「生命」の三つ。

ああ、そうだね。えっと、一つも分らない。

一つも分っていないということが分った訳だ。これは気づきだよ。

うん。

一つずつ見て見ない？まず「無」の実質って誰が研究しているのかな。空海とか親鸞とかお坊さんが書いているよね。ヴェーダにあるかな？ 哲学者も研究しているのかな？ 研究結果を分り易く書いて発表していると思う？ そんな本見つけた？

さあ。

私が知っている限りでは「無とはすべてなり、有とは仮想なり。しかして無と有とは一如なり」なんて大きく括ってはああるけれど、「無の実質はこれこれです」という本は読んだことないわ。

ああ、そうね。確かに内容と実質の分析はしてないわね。

次に知性はどうか？ これは誰が研究しているの？ 脳の専門家？ 心理学者？ やっぱり哲学者？ 知性の機能は説明していても「知性の実質とはこれこれなり」という研究はしてないんじゃない？

かもね。

じゃあ生命はどう？ お医者さんが研究しているかな。いやお医者さんは生命が宿っている器の肉体の構造と機能の研究をしているだけよね。肉体を生かしている生命そのものの実質のことは研究対象じゃないよね。肉体から生命が抜けてしまったら、「ご臨終です」って言うだけよね。

そうそう。そうよ。

じゃあ三つともハッキリ説明している本も人もいないんじゃない？ 特にも一人で三つとも説明している人なんていないみたいよね。

いないと思う。

これを小田野先生は説明しますって約束しているのよね。すごいと思わない？

うん。でも今までちっともすごいというのに気が付かなかった。そんな風にこの本の一行一行しっかり読んでなかったから。

私も読んでなかった。

読んでいてもちっとも分っていなかったんだ。分っていないということにも気が付かないでいた。これじゃ応用なんて無理無理。

そうなの。これが次の文の意味。

誰でも「もの」の本質を正しく知り、完き理解を遂げれば、その「もの」をよく活用することは必然である。正しく活用できないのは、その「もの」を知らないという実証である。

これに関して飯島秀行さんが面白いことを言ってらした。

「水が氷るのは知ってますよね。氷点というので氷ると皆思っていますよね。この水が室温、え〜と今25度か、この温度で氷ると思う？ 見せようか」

と言うとビデオを見せてくれたの。普通の部屋で普通の水道水を水差しからビーカーに注ぐとそれがみるみる氷ったの。

さて、これは飯島さんが、「水と空気」という「もの」の本質を正しく知っているの、活用出来たという実証の一例だと思うの。

もう一人、世界一のバイオリンを作っている日本人がいるの。この人が作ったバイオリンはストラデバリウスより良い音が出るという音楽家たちが大勢いるの。この人はバイオリンという「もの」を徹底的に研究して、良い音色というものの本質をつかんだのだと思う。だから活用できたわけ。

つまり「無」も「知性」も「生命」も何かを知らないでどうして活用出来るかということ先生は言いたのだと思う。できないからこそこの世は地獄のように苦しくて、病人ばかりで、世界は闘争の明け暮れで、どうしても戦いが終わらない。地球上の生物と人々が幸福で、健康で、世界が平和になるようにと願って、先生は本を書いたの。

という訳で一時間以上にわたってたったの1ページを二人がかりで読んで、いかに本の読み方を知らなかったかを発見した訳です。

2012.8.12